〈青森県史〉の窓 101

古懸不動尊の出汗

蔦谷大輔
（県民生活文化課 県史編さんグループ非常勤嘱託員）

「古懸山不動尊開帳として、参詣の男女引もらず、ぞめきのじゃれ事、菓子・くだ物の売声、往来殊に賑しく、…」これは、1860（万延元）年5月、弘前藩内の道中の地誌や寺社縁起、風俗などを描き出している。

国上寺護摩堂。1858（安政5）年の棟札がある。
（2010年10月8日撮影、青森県史編さん資料）

ここに見える「古懸山不動尊」とは、平川市碇ヶ関北部の古懸地区にある真言宗寺院、古懸山国上寺の本尊である不動明王像を指す。不動尊開帳の噂を聞きつけた人々で街道筋が賑わっている様子が描かれており、人々の不動尊への厚い信仰心がうかがわれる。

寺院縁起によると、国上寺は7世紀初めころの草創という。江戸時代には弘前藩主の帰依を受け、最勝院・百沢寺・橋雲寺・久渡寺とともに藩内の真言宗五山の1つに数えられ、寺領として200石が与えられた。

さて、古懸不動尊には、「出汗」といって仏体の表面に湿気を帯びる現象がたびたび起こった。当時の人々にとって、出汗は藩内の異変の前ぶれとして認識されており、確認されると、藩の命でただちに祈祷が行われたことが、藩の公式記録に頻繁に見える。祈祷と同時に神楽奉納や護摩焚きも行われ、その費用は藩が負担した。藩は、出汗によって藩内の人々の社会不安が増すことをおそれており、そのために、不動尊の様子を常時監視し、出汗の際は迅速に対応したのである。

しかし、出汗を異変の前兆と見る認識に異を唱えた人物がいる。1750年代に藩財政立て直しを目指して藩政改革を実施した乳井貢である。彼は、湿気が多い時期に出汗は起こるが、快晴が続き干ばつの時は起こらないから、たんなる自然現象であって祈祷は無意味である、と指摘したという。彼は、4代藩主津軽信政を祀る高照神社すらも特別視しない姿勢を見せており、こうした藩を守護する仏神をないがしろにした乳井の考えに、藩内の人々は反発の姿勢を見せたようである。

1758（宝暦8）年3月、改革による藩内経済・流通の混乱の責任を問われて乳井は失脚した。これ以後も出汗への祈祷は引き続き行われており、古懸不動尊への信仰心が揺らぐことはなかった。不動尊は、1893（明治26）年の火災によって、本堂とともに焼失してしまったが、その後鋳造されており、現在も多くの人々から厚く信仰され続けている。